

直島への手紙 第五信

前略 大岸 様

10月初旬になり、気温も下がり穏やかな気候となってきましたが、いかがお過ごしでしょうか？

先日、香川県内の考古学を研究する有志7人で直島群島の家島に行ってきました。8月の暑すぎる中、家島の海岸線を歩き回り、新たな発見をすることができました。家島の海岸線や藪に包まれた平地には、塩づくりに使われていた製塩土器が落ちていました。古墳時代から飛鳥時代のころに使われていたものであると考えられ、古くから直島群島でも塩づくりが行われていたことを確認することが出来ました。

さて、土器製塩の島といえば、国史跡に指定されている喜兵衛島製塩遺跡が有名ですね。そもそも当時の人々が、製塩土器を使ってどのように塩をつくっていたのでしょうか。大岸さんは御存知ですか？

古代の塩づくりは、土器をつかっていたので、「土器製塩法」と呼ばれています。また、「藻塩法」とも呼ばれ、乾燥させた海藻を製塩土器にいれ、^{ぜんこう}煎熬（^{かんすい}鹹水を煮詰めること）することで塩を得ていたと考えられています。そのため、喜兵衛島製塩遺跡では、「土器製塩法」に用いた製塩土器が多量に出土しますし、土器製塩炉が見つかる場合もあります。

直島群島で行われた塩づくりについて調べたところ、直島で、およそ2000年前の弥生時代後期から土器製塩が始まったことが分かりました。香川県埋蔵文化財センターと直島町教育委員会が行った令和3年度から令和5年度の分布調査により、直島西浜に所在する風戸山西遺跡から当該期の製塩土器が見つかっています。古墳時代になりますと、喜兵衛島、家島、葛島、荒神島でも塩づくりが行われるようになります。直島を含むこれらの島々では、古墳時代中期（5世紀頃）に一度、塩づくりがかなり低迷しますが、古墳時代後期（6世紀頃）に再び活発になり、奈良時代まで継続して

塩づくりが行われていきます。

このように塩づくりの盛衰を出土する製塩土器から考えてみますと、各時代の製塩土器が出土する島があることが分かります。さらにその島々にはいくつかの共通点も見えてきました。

まずは、日常的に使用される土器が出土することです。このことから、塩づくりのために島に渡っている人々だけではなく、島に定住しながら塩づくりを行っている可能性があります。

次に、湾状の地形で岩礁がなく、船を接岸しやすい地形に遺跡が立地している点です。これは、藻塩や海水が得やすいという点も重視されていると思いますが、船が接岸しやすい場所を選んでいる可能性があると思っています。作った塩を外へ運び出す必要がありますので、運搬のことも含めて、場所を選んでいたのではないのでしょうか。

このような点は一部かもしれませんが、断続的であっても同じ場所で長い間塩づくりをしているということは、直島群島の人々は、先人たちが培った知識や経験から学び、塩づくりを行ってきたことを示しているのではないのでしょうか。また、近代以降も、他の島に耕作地や塩田を所有し、島を行き来しながら生活していたことを直島の方が教えてくれました。このことから考えると、居住する場所と塩づくりを行う場所など周辺の島々をうまく利用しながら生活していたことも関係しているのかもしれませんが、まさに先人の知恵が直島の人々を支えていたのですね。

さて、今回は直島群島での塩づくりについて調べてみましたが、島の生業ということで、農耕について興味が湧きました。島の人から教えてくれた無人島での農耕について、少し調べてみます。調べて分かったことをお手紙に書かせていただきますね。

早々

展示担当 行天 就要



家島での調査を終えた有志とともに渡船にて



喜兵衛島の北西浜の製塩土器